

## ・ 国内編

### 1. 終末期の医療、終末期のケア

#### 1.1 在宅ケア

# ・ 国 内 編

## 1 . 終末期の医療、終末期のケア

### 1.1 在宅ケア

## ． 国内編

### 1. 終末期の医療、終末期のケア

#### 1.1 在宅ケア

No.1	
<b>24 時間在宅ケアにおけるヘルパー単独体制と看護婦・ヘルパー協働体制の比較：協働のあり方とその影響に焦点を当てて</b>	
Author(s)	竹内奈緒子、村嶋幸代、服部真理子
Article	日本在宅ケア学会誌
Vol/No/page	4/1/24-30
Year	2000
<p>4 時間巡回ヘルプには、ヘルパー単独の体制と訪問看護ステーションと連携した看護婦・ヘルパー協働の体制があり、これまでは後者が推奨されてきた。後者には看護職による日中・早朝・準夜・深夜帯の訪問，看護職とヘルパーの密接な連携が含まれる。</p> <p>この協働のあり方とその影響を検討するため、都内のヘルパーステーションから 2 タイプの例を選び、特性（健康状態など）、24 時間ケアの提供方法、在宅死の状況を比較し、両者の差異を分析した。</p> <p>その結果、単独体制では協働体制よりも利用者の自立度が高く、独居が多かった。在宅死亡者の出現率には両群で差がなく、単独体制では、窒息、急変などケアプラン上想定されていない在宅死が多かった。また、協働体制での在宅死亡者は全員ターミナルステージで、ケアプランでも配慮されていた。</p> <p>これらの知見から、利用者の変化に速やかにケアプランを変更するなどといった対応をし、今後増加する医療処置、ターミナルケアに対応していくために、24 時間巡回ヘルプは、看護職とヘルパーが密接な連携をして行う必要があることを示している。</p>	

## ． 国内編

### 1. 終末期の医療、終末期のケア

#### 1.1 在宅ケア

No.2	
在宅ケアの利用者アウトカムと費用対効果の良否に影響する利用者条件	
Author(s)	内田陽子、島内節
Article	日本看護管理学会誌
Vol/No/page	5/1/5-14
Year	2001
<p>介護保険制度の整備以降、在宅ケアサービスの量的な整備は進んだものの、質を高めつつコスト管理を行うような研究は少ない。</p> <p>そこでこの論文では、在宅ケアアウトカムと費用対効果の良否に影響する利用者条件を明らかにすることを目的に、5つの訪問看護ステーションの介護保険対象者 505 人を対象とし、アウトカム及び費用の測定ができた 383 人を分析している。</p> <p>分析の結果、看護職によるアウトカム評価では全体的に「現状維持」レベルが多かった。また、利用者満足度では全体的に高い傾向にあった。</p> <p>次に、整容、交通機関の利用、尿失禁、呼吸、褥瘡の項目で、アウトカム変化は最低値維持群、低下群が現状維持、改善、最高値維持群より訪問看護療養費の平均値が高い傾向にあった。</p> <p>費用対効果に影響を及ぼす利用者条件は自立度、重症度、痴呆度であり、さらにカテーテル処置や経管栄養、褥瘡処置などの医療処置のある者は費用対効果が悪かった。</p> <p>在宅ケアを効果・効率的に進めていくには、利用者の自立度向上のケア、痴呆悪化や合併症の予防的ケア、尿失禁や褥瘡、呼吸等の医療的処置の長期化を避け、早期回復を図る専門的ケアの改善および管理が求められるとしている。</p>	

## ． 国内編

### 1. 終末期の医療、終末期のケア

#### 1.1 在宅ケア

No.3	
在宅ケアにおける薬局・薬剤師機能のあり方に関する研究	
Author(s)	恩田光子
Article	日本老年医学会雑誌
Vol/No/page	39/6/618-625
Year	2002
<p>薬剤師の在宅ケアへの取り組みは、より質の高い在宅ケアの実現のための重要な論点である。薬剤師には、処方箋調剤、在宅ケアチームへの参画、医薬品等の供給等の役割が期待されており、高齢社会を支える社会資源として「かかりつけ薬局」を定着させることがこれまでも提言されている。しかしながら、日本における在宅ケアにおける薬局・薬剤師の取り組みは不十分であり、実際に訪問薬剤管理指導の利用率も低い。</p> <p>そこで、薬局・薬剤師が在宅ケアにおいて有効活用されていない要因を検討するために、医師、看護・介護職、薬局・薬剤師および利用者間での認識の違いや薬局・薬剤師への期待する役割の認識の違いなどを把握することが、この研究の目的となる。</p> <p>T市を事例にアンケート調査を行った結果、次のような結果を示している。</p> <p>まず薬局・薬剤師の重要性の認識においては、薬局・薬剤師は訪問薬剤管理指導をより重要だと認識しているのに対して、利用者は在宅医療・福祉サービスの相談応需に対してより高いニーズを有しており、医師は在宅医療・福祉サービスに関する相談を応需することへの要望を持っていた。</p> <p>このことから、利用者のニーズおよび医師の要望と薬局・薬剤師の自らの業務に対する重要性の認識には違いがあり、薬局・薬剤師は相談応需業務の充実にと詰める必要があることが示唆されている。</p> <p>また、薬局・薬剤師と他職種（医師、看護・介護職）の業務連携の推進については、とくに看護・介護職の訪問薬剤管理指導の認知度を高めること、医師の薬局・薬剤師の在宅ケアサービスへの参加に対する期待度を高めるべきだという点が示唆されている。</p> <p>以上を踏まえた上で、さらに筆者らは地域完結型のサービス提供のための多職種間連携の必要性を示唆している。</p>	

## . 国内編

### 1. 終末期の医療、終末期のケア

#### 1.1 在宅ケア

No.4	
保健師と訪問看護師が捉えた在宅ケアマネジメントのニーズに関する研究	
Author(s)	中谷久恵、島内節、泉宗美恵、並木奈緒美、秋山奈菜子
Article	日本地域看護学会誌
Vol/No/page	5/1/50-55
Year	2002
<p>保健師と訪問看護師が捉えた在宅ケアマネジメントのニーズの全体像と、ニーズの表現方法およびその特徴を明らかにすることがこの研究の目的となる。</p> <p>そこで、在宅サービスの利用を開始した要介護者にケアマネジメントを行った保健師 132 人、訪問看護師 28 人の計 160 人を対象とし、調査票によって、要介護者とケアマネジャーの属性、ケアプランに記載したニーズと短期援助目標および利用したサービスについてを把握した。</p> <p>その結果、回収できた 142 人の要介護者のデータを分析し、862 のニーズを把握し、これらのニーズの全体像を 11 の上位領域と 46 の下位領域に分類している。</p> <p>とくに上位領域において多かったニーズは「健康管理」「介護」「日常生活動作」であった。また、保健師や訪問看護師が要介護者のみでなく家族の問題にも視点を向けており、介護者のニーズも重要視していることが明らかとなった。</p>	

## ． 国内編

### 1. 終末期の医療、終末期のケア

#### 1.1 在宅ケア

No.5	
在宅の利用者アウトカムに影響するケア項目と実施度	
Author(s)	島内節、清水洋子、友安直子、森田久美子、川上千春、内田陽子
Article	日本地域看護学会誌
Vol/No/page	4/1/26-33
Year	2002
<p>在宅ケアにおける質を構造・プロセス・アウトカムから評価する視点は少しずつ発展している。</p> <p>この研究では、ケアプロセスを具体的にケア項目とその内容、実施度として捉え、在宅ケアにおける利用者アウトカムに注目して、アウトカム改善をもたらしやすいケア項目、ケア実施度、ケア実施内容を明らかにすることを目的としている。</p> <p>そこで、7ヶ所の訪問看護ステーションの40歳以上の利用者で、ターミナルを除く2ヶ月間のケア実施事例527事例を対象として、利用者アウトカム評価（23領域41項目）とケア項目、ケア実施度、ケア実施内容（ケア項目60項目）を、2ヶ月間でアウトカムが上昇したものを改善群、しなかったものを非改善群として比較して分析した。</p> <p>その結果、全体的にアウトカムはケアの「実施が必要時いつもなされる」ほど向上すること、とくにケアの評価が有効であることがわかった。アウトカム改善をもたらしやすい利用者本人のアウトカム領域は、ADLではJABC自立度・移動、IADLでは食事の準備・交通機関利用・鍵・火災・水道の安全性・冷暖房管理、意欲レベル、尿失禁であった。</p> <p>介護者のアウトカム領域は、身体的疲労感、精神的疲労感、介護知識・技術、介護者の時間的余裕、介護継続意志であった。</p> <p>これらの知見は、今後のケアプランの策定に活用できるものであると言える。</p>	

## ． 国内編

### 1. 終末期の医療、終末期のケア

#### 1.1 在宅ケア

No.6	
在宅療養患者の終末期における家族・看護職・医師による療養評価の一致度と療養状態の検討	
Author(s)	橋本恵美子、正野逸子、大田直実
Article	日本在宅ケア学会誌
Vol/No/page	7/1/68-76
Year	2003
<p>在宅療養患者を介護する家族の介護負担が少なく、また医療者が限られた資源を用いて効率的かつ効果的なサービスを提供するためには患者の療養状態の評価の違いを可能な限り最小限にとどめておくことが求められている。</p> <p>この論文の目的は、終末期まで在宅で療養し死亡した患者を介護した家族、患者を担当した看護職、医師の間における療養評価の一致度と終末期における療養状態の程度を検討することであり、そのために 13 事例を対象として家族、看護職（訪問看護師、看護師、保健師）、医師を対象にした自記式調査票と野口らの判定票を用いて調査している。</p> <p>その結果、療養評価が一致している事例では、看護職や医師がともに在宅療養の早期から関わり、その期間が長い等共通点が見られた。</p> <p>また、療養評価が一致した事例では患者の在宅療養への移行前に入院、通院していた医療機関に所属していたのに対して、一致しなかった事例では前の医療機関からの紹介によるかかりつけ医となる傾向が見られた。</p> <p>また家族については、評価が一致した事例では、患者との同居期間が長かった。これらの結果から、療養評価が一致していた事例では、家族は同居期間、介護期間が長く、医師や看護師は早期から関わりを持ち、その期間も長いことが明らかになった。</p>	

## ． 国内編

### 1. 終末期の医療、終末期のケア

#### 1.1 在宅ケア

No.7	
介護老人保健施設における死の看取りを含むターミナルケアへの組織的取り組み：2施設の看護管理者の面接調査より	
Author(s)	原敦子、小野幸子、坂田直美、梅津美香
Article	老年看護学
Vol/No/page	8/1/86-94
Year	2003
<p>介護老人保健施設（以下、老健）は、医療機関から在宅へと繋ぐための中間施設として位置づけられてきたが、近年は医療を必要とする高齢者が増加し、かつての家庭復帰機能から在宅支援機能へと移行しつつある。そして、ターミナルケアを実施している施設も増え始めている。</p> <p>この研究は、ターミナルケアを実施している2施設の看護職各1名への面接調査データをもとに、老健において死の看取りを含むターミナルケアを組織的に取り組むことを可能にした要因を明らかにすることである。</p> <p>そこで、2施設に共通した要因は「医療機関との有機的連携がとれている」「介護・看護のトップマネジメントの役割をもつ看護管理者が『高齢者ケアにおいては当然死の看取りを含むターミナルケアが必要』という考えをもっている」「開所時より施設方針として『本人・家族の求めに応じて最期まで看取る』があった」「組織的取り組みを強化する事例に遭遇したことを契機に、死の看取りを含むターミナルケアに関する施設のケア方針・方法を明確にし、職員への徹底化を図っている」などであり、利用者の求めに応じて柔軟に対応しようとする姿勢を持っていることであった。</p> <p>このことは、これまでの介護保険施設等がその施設の持つ機能によって区分され、その区分の一部のみがターミナルの機能をもっていたことに対する再考を促すものとなっている。</p>	



## ． 国内編

### 1. 終末期の医療、終末期のケア

#### 1.1 在宅ケア

No.8	
在宅終末期ケアにおける「ホームヘルパー」の専門性の検討	
Author(s)	山田忍
Article	介護福祉学
Vol/No/page	10/1/33-40
Year	2003
<p>終末期ケアは多職種の専門職が関わる活動であるが、なかでも患者の生活を中心に考えたときホームヘルパーが関わる役割は大きいものがある。しかしながら、ホームヘルパーに関しての専門職としての認識も、看護学上の位置づけもまだ未発展の段階にある。</p> <p>本論文は、終末期におけるホームヘルパーの専門性とは何かについて明らかにすることを目的に、医師、看護師、ホームヘルパー、患者家族へのアンケート調査を行っている。</p> <p>その結果、患者家族のホームヘルパーへの希望は、時間的拘束や介護費用に関するものが多く、専門的技術を望む以前に介護の負担の軽減を強く求めているものと推定できるものであった。</p> <p>医師や看護師のホームヘルパーへの役割調査では、医師が「家族の精神的安定を図る」がもっとも高かったのに対して、看護師では「患者の望む介護の提供」が高くなっており、医師は家族に、看護師は患者に目を向けて役割を考える傾向が示唆されている。</p> <p>以上から、患者や家族の日々の細かい変化や身体的、精神的苦痛、経済問題などを日々関わっているホームヘルパーだからこそ感じ取り、それらの情報を他の医療スタッフにつなげ、介護の負担の軽減を可能にする具体的な場を作り、他部門との連携を実践してゆくことがホームヘルパーの専門性であるとしている。</p>	

## ． 国内編

### 1. 終末期の医療、終末期のケア

#### 1.1 在宅ケア

No.9	
<b>ホームヘルプサービス施策におけるコーディネーターの役割の変遷</b>	
Author(s)	鳥海直美
Article	介護福祉学
Vol/No/page	10/1/68-80
Year	2003
<p>ホームヘルプサービス施策におけるコーディネータの役割は、その施策の展開に伴って大きく変化してきた。</p> <p>この論文では、コーディネータが初めて制度的に位置づけられた「主任家庭奉仕員制度」以降の、コーディネータの制度や役割の変遷を分析し、さらに現在求められている役割の再構成と、そのための問題点を指摘している。</p> <p>現在のホームヘルプサービスにおけるコーディネータは、利用者主体や自立生活支援という理念の具体化と、サービスの質の向上が求められる中で、大きな変化の途上にある。</p> <p>この論文ではとくに次の4点(利用者による生活やサービスのコーディネートを支援するための制度整備、介護関係における非対称的な関係を対等にするためのコーディネート機能の明確化、ケアマネジメントシステムにおけるコーディネータの位置づけの明確化、財政基盤の改善)がコーディネータの役割の再構成のための手がかりになるとしている。</p>	

## ． 国内編

### 1. 終末期の医療、終末期のケア

#### 1.1 在宅ケア

No.10	
<b>在宅ターミナルケアにおける家族対処の特徴と看護介入</b>	
Author(s)	東清巳、永田千鶴
Article	日本地域看護学会誌
Vol/No/page	6/1/40-48
Year	2003
<p>終末期ケアにおいて訪問看護師は、平安で尊厳ある死を迎えることができる状況を整えてゆくことが求められており、家族が看取りの課程で直面する困難な状況にどのように対処するか、看護師はどのように介入することができるかを知ることは、在宅看護の質の向上のために必須となる。</p> <p>そこで、この報告では、在宅ターミナルケア 6 事例（家族と担当看護師）の資料と、担当看護師への面接（当時の想起を前提）データをもとに内容分析を行って分析している。</p> <p>その結果、家族対処の特徴として 10 項目、家族対処を促す看護介入として 11 項目を抽出している。</p>	

## ． 国内編

### 1. 終末期の医療、終末期のケア

#### 1.1 在宅ケア

No.11	
在宅療養高齢者の看取りを終えた介護者の満足度の関連要因：在宅ターミナルケアに関する全国訪問看護ステーション調査から	
Author(s)	島田千穂、近藤克則、樋口京子、本郷澄子、野中猛、宮田和明
Article	厚生指標
Vol/No/page	51/3/18-24
Year	2004
<p>在宅ケアのアウトカムを評価する重要性については日本でも議論されているが、未だに確立されていない。日本におけるターミナルケアは、患者自身が安楽に死を迎えることができ、残された介護者の悔いが最小限に留められるように目指しているが、これを評価する際には死にゆく者本人や遺族に解答を求めることは倫理的にも手続き的にも難しい。</p> <p>そのため、訪問看護師などが介護者の満足度を推定して評価する方法が研究されており、本稿も在宅ターミナルケアのアウトカム評価として訪問看護師が介護者の満足度を推定するための基礎資料として、介護者本人の満足度と訪問看護師の推定の一致度を明らかにし、この二つの満足度の関連性を分析している。</p> <p>その結果、介護者は、主観的な思いが満足度を高める要因であったのに対して、看護師は、客観的な指標に基づき「介護者の満足度」を推定していることが明らかになっている。そこで、看護師がズレを発生させる要因を自覚し、そのズレを縮小させる方法が必要であることが示されている。</p>	

## ． 国内編

### 1. 終末期の医療、終末期のケア

#### 1.1 在宅ケア

No.12	
医療的ケアを担う家族介護者支援に関する研究：医療的ケアに慣れる過程で体験する出来事の意味	
Author(s)	樋口キエ子、田城孝雄
Article	日本在宅ケア学会誌
Vol/No/page	8/1/2/50-57
Year	2004
<p>医療依存度の高い在宅療養者が増加する中で、家族の介護負担が増大している現状にある。</p> <p>この論文では、これまでの在宅介護継続とその破綻の研究が、介護者の生活問題やストレス、疲労等に焦点をあてていたのに対して、医療処置を担わざるを得ない家族の実態に焦点をあてて分析している。</p> <p>調査は、訪問看護ステーションを利用している 16 名の介護者であり、半構成的面接による聞き取り調査を行い、そのデータを分析している。</p> <p>結果として、ケアに慣れる過程で体験するたいへんなことは、「処置に慣れるまでは緊張と疲労の蓄積」を主題とする 3 つの段階（驚きととまどい、目一杯やる、自然にやれる）を経ることを示している。</p> <p>その上で、在宅開始から 3 ヶ月ほどまでにこの苦勞をしていることから、在宅早期における支援や在宅移行時の支援強化の必要性が示されたとしている。</p>	

## ． 国内編

### 1. 終末期の医療、終末期のケア

#### 1.1 在宅ケア

No.13	
<b>在宅末期がん患者の家族に対する教育支援プログラムの適切性の検討</b>	
Author(s)	福井小紀子、川越博美
Article	日本看護科学会誌
Vol/No/page	24/1/37-44
Year	2004
<p>在宅末期がん患者の家族を対象とした支援プログラムの開発と、その効果に関する検証として訪問看護師へのアンケート調査を行っている。</p> <p>欧米の先行研究を踏まえて開発された支援プログラムは、患者の疾患に関する情報提供、日常生活上のケアを含む患者への身体的ケア法の教育、患者・家族双方の心理的問題に関する情報提供および心理的対処法の教育の3つの項目にまとめられるものとなっており、さらにこれらについてより詳細な項目に細分化して作られ、冊子としてまとめられている。</p> <p>さらに、この支援プログラムの妥当性と実施可能性について訪問看護師 29 名による質問紙調査を行うことで、必要な修正箇所等を発見し、適切な改編を加えた支援プログラムを開発している。</p>	

## ． 国内編

### 1. 終末期の医療、終末期のケア

#### 1.1 在宅ケア

No.14	
在宅ケアの質評価法( Home Care Quality Assessment Index : HCQAI ) の開発	
Author(s)	荒井由美子、熊本圭吾、杉浦ミドリ、鷲尾昌一、三浦宏子、 工藤啓
Article	日本老年医学会雑誌
Vol/No/page	42/4/432-443
Year	2005
No.15	
在宅ケアの質評価法 Home Care Quality Assessment Index : HCQAI の妥当性の検証	
Author(s)	熊本圭吾、荒井由美子
Article	日本老年医学会雑誌
Vol/No/page	43/4/518-524
Year	2006
<p>在宅ケアのニーズやその重要性は近年高まり続けているものの、施設におけるケアの質の定量的評価に比べて、在宅ケアの評価の取り組みはまだ端緒にすぎたばかりであり、その評価指標も定まっていない。</p> <p>そこで、これらの研究は、在宅ケアの質評価尺度 Home Care Quality Assessment Index: HCQAI の開発およびその妥当性の検証を行っている。HCQAI は 要介護高齢者の状態、介護者および介護の状態、居宅内の介護環境の三領域から、総合的に在宅ケアの質を評価する指標であり、41 項目からなる。</p> <p>これらの研究では、HCQAI の開発における理論的背景と、その指標の妥当性について検証しており、概ね各下位尺度は想定された妥当性を示していることが示唆されている。</p> <p>よって、家族介護者による在宅ケアの客観的評価、とくにインプットやプロセスの評価に有効であることが示唆されている。</p>	

## ． 国内編

### 1. 終末期の医療、終末期のケア

#### 1.1 在宅ケア

No.16	
<b>末期がん患者の在宅診療の取り組み</b>	
Author(s)	伊賀瀬道也、中村俊平、越智雅之、小原克彦、永井康徳、三木哲郎
Article	日本老年医学会雑誌
Vol/No/page	44//734-739
Year	2007
<p>病院から在宅診療へのスムーズな移行に影響を与える因子が何かを検証するために、在宅医療専門診療所において訪問診療に携わった末期がん患者 66 名のデータを分析している。</p> <p>その結果、 初診時で認知症 30%、中心静脈栄養管理症例 23%、持続的酸素吸入 45%、排泄の要介助 70%と介助を必要とする患者が多く、 主介護者は 7 割が女性であり介護に携われる人員は平均 2 名 / 1 家庭、 5 割もの症例において介護保険が申請されておらず、 紹介元病院とクリニック間の退院前カンファレンスは 21%しか行われていなかった。また、 自宅で死亡した 43 例の死亡時刻は通常勤務時間帯以外が 8 割を占め、 平均在宅医療期間は 62.5 日であったが在宅医療開始後 2 週間で 10%を超える患者が離脱（死亡あるいは病状悪化による再入院）をしていた。</p> <p>これらの結果を踏まえ、専門的な医療の提供と介助が 24 時間必要であることから、 末期がん患者の在宅医療を入院でのケアと同様に行うために 24 時間対応の在宅医療専門診療所が必要であること、 在宅日数が短いことから、家庭で家族とゆとりある時間をもつために早期の在宅移行が必要であること、そしてこれらを実現するために 早期に在宅医療への移行を目的とした紹介元病院と在宅医療専門診療所との退院前カンファレンスが必要であること、が提案されている。</p>	



## ． 国内編

### 1. 終末期の医療、終末期のケア

#### 1.1 在宅ケア

No.17	
<b>在宅介護における主介護者の生活習慣と精神的健康に関する研究</b>	
Author(s)	森千佐子
Article	日本在宅ケア学会誌
Vol/No/page	10/2/51-58
Year	2007
<p>在宅における介護ニーズが高まる中で、介護者の負担感や健康についての研究の蓄積はこれまで多くなされてきている。しかし、介護者の生活習慣と健康状態についての研究は少ない。</p> <p>そこでこの研究では、在宅高齢者の主介護者の生活習慣と精神的健康及び介護負担との関連について検討を目的としている。</p> <p>調査としては、A 県 B 市内の居宅介護支援事業者 3 ヶ所を利用する主介護者 130 名と、同地域に住む介護を行っていない非介護者 125 人への質問紙調査を行っている。</p> <p>その結果、主介護者の精神的健康度は非介護者と比較して不良な傾向にあり、主介護者の生活習慣については、食事時間が不規則、中途覚醒や不眠がある、自由時間が少ない場合に精神的健康度は不良な傾向にあり、定期受診している主介護者は受診していない人に比べて抑うつ傾向にある、などの結果が示されている。</p>	

## ． 国内編

### 1. 終末期の医療、終末期のケア

#### 1.1 在宅ケア

No.18	
<b>在宅高齢者の終末期ケアにおける経過時期別にみた緊急ニーズ</b>	
Author(s)	島内 節、鈴木琴江
Article	日本看護科学会誌
Vol/No/page	28/3/24-33
Year	2008
<p>在宅医療におけるがん終末期患者のケア期間は、がん以外の患者より遥かに短期間であると報告されており、またセルフケアレベルにも違いがあると報告されている。そのため、がんとはがん以外では、ケア期間や年齢からみた症状・自立度に違いがあるため、これらのニーズの違いを考慮する必要がある。</p> <p>そこでこの研究では、がんとはがん以外の在宅高齢者の終末期ケアにおける経過時期別の（予定されていない）緊急ニーズについて、両群の類似点と相違点および特徴を明らかにすることを目的に、訪問看護ステーションにおいて在宅療養を受け、在宅死した高齢者のカルテを分析している。</p> <p>その結果、全在宅の一人当たりの緊急ニーズの発生は、緊急の電話についてがん群で3.3回、非がん群で3.5回、緊急の訪問についてがん群で2.2回、非がん群で2.7回であり、いずれも半数以上が時間外であった。</p> <p>また、両群の共通点として、「症状の変化」や「身体的ケア」に対する緊急ニーズが高く、また開始期には「チューブ類 / 医療機器のトラブル」が多かった。</p> <p>また、がん群では開始期から小康期にかけて「症状の悪化」「疼痛コントロール」のニーズが高く、非がん群では開始期における「介護技術」「服薬管理」のニーズが高いなど、違いが報告されている。</p> <p>これらの知見から、時間外の緊急要請のために、正確な判断と他の機関との連携などの協力支援体制が必要であることが示されている。</p>	

## ． 国内編

### 1. 終末期の医療、終末期のケア

#### 1.1 在宅ケア

No.19	
在宅ターミナルケアに関わる訪問看護師にとっての遺族訪問の実践とその意味	
Author(s)	平賀睦
Article	日本地域看護学会誌
Vol/No/page	10/2/26-32
Year	2008
<p>訪問看護では、利用者と家族が一つのケア単位であり、在宅ターミナルケアの帰結として利用者が亡くなった後に、悲嘆の心理過程にある遺族に死別後のケアを行うべきだとされているものの、死別後のケアを行っている訪問看護師は6割程度である。その背景には、診療報酬が無いことや教育不足、役割の曖昧さなどが指摘されており、訪問看護師による遺族への関わりという実践の意義について明らかにすることが求められている。</p> <p>そこで、この研究では遺族訪問の豊富な経験を持つ訪問看護師8名への聞き取り調査から、遺族訪問の実践とその意味について明らかにした。</p> <p>その結果、在宅ターミナルケアに関わる訪問看護師は、遺族の死の受容と介護生活の肯定的な意味づけを促進し、その後の人生への橋渡しをする、訪問看護師自身の精神的健康を保ち、在宅ターミナルケア対象者の生き方を尊重した支援技術を磨く、という2つの方向性をもって遺族訪問を行っているとの考えが示された。</p> <p>この遺族訪問への訪問加護し自身への意義の発見が本研究の重要な知見である。</p>	

## ． 国内編

### 1. 終末期の医療、終末期のケア

#### 1.1 在宅ケア

No.20	
<b>遺族による在宅ターミナルケアのサービス評価</b>	
Author(s)	島内節、小野恵子
Article	日本在宅ケア学会誌
Vol/No/page	12/2/36-43
Year	2009
<p>訪問看護ステーションを利用した患者の遺族から在宅ターミナルケアのサービス評価を明らかにすることとし、その評価結果から、「看取りの状況」と「ケアへの評価」の関係を探ることを目的としている。</p> <p>そこで、一つの訪問看護ステーションで2003年1-12月に死亡した在宅ターミナル患者の介護者であった遺族（がん患者46名中38名、と非がん患者49名中42名が回答）を対象とした郵送アンケート調査を行い、ケアへの評価（計28項目）と看取りの状況（5項目）との関係を分析した。</p> <p>その結果、在宅ターミナルケアにおいて、がん患者、非がん患者双方において訪問看護の緊急時対応について、高い評価を得ていた。家族が死を現実のものとして受け止めることができるような看取りには、死の準備、家族との関係調整、心理・精神的援助などが関連する要因となっていた、という知見を得ている。</p>	